第 25 回 IAEE(国際エネルギー経済学会)年次世界大会（Aberdeen）に参加して

（財）日本エネルギー経済研究所
常務理事　首席研究員　　藤目　和哉
エネルギー動向分析室長　小山　堅

はじめに

2002 年 6 月 26－29 日、英国スコットランドのアバディーンにおいて、International Association of Energy Economics（IAEE）の第 25 回年次世界大会（International Conference）が開催された。エネルギー経済の問題を研究・分析する大学関係者、研究者、産業界および政府関係者等が集まる IAEE は毎年世界大会を開催するが、今年は「Innovation and Maturity in Energy Markets: Experience and Prospects」というテーマの下で、10 の Plenary Session(うち最初の Session が Opening Session)、21 の Parallel Session、4 の Poster Session、Closing Session が行われ、世界各国から約 300 名が参加した[1]。以下では、同会議における主要 Session での発表のうち、筆者にとって特に興味深かったものを中心に、会議の内容を報告する。なお、報告されたテーマのうち多くの報告が Proceedings として一つの CD に収められている(同 CD は持ち帰り資料として当研究所資料室に収蔵した)。以下、小山が前半（項目１、２、３）、藤目が後半（項目４、５）を主として担当執筆した。

１．高まるエネルギーセキュリティ問題への関心

今回の IAEE 会議に参加して最も印象に残ったことの一つは、エネルギー問題の研究・分析に関して、エネルギーセキュリティ問題が再び重大な関心事となっていることが改めて実感されたことである。特に、会議冒頭の Plenary Session１では、以下のように 3 人のスピーカーがいずれもエネルギーセキュリティ問題の重要性を指摘している。

- 第 1 スピーカーの米国エネルギー省・Assistant Secretary の Vicky Baily 氏はブッシュ政権のエネルギー政策上エネルギーセキュリティ問題が極めて重視されていることを説明した。同氏は、米国は市場メカニズム重視の基本方針を保ちながら、ロシア・カスピ海周辺諸国との協力、戦略石油備蓄の活用と途上国の備蓄努力促進、アジア諸国との協力を通してエネルギーセキュリティ確保を図っていくことが重要であると指摘した。
- 次いで、International Energy Agency（IEA）の事務局長 Robert Priddle 氏は、1990 年代にはエネルギー問題に関して、環境問題や市場自由化や規制緩和による効率化に焦点が当てられ、セキュリティ問題への関心が相対的に低下したものの、1999 年以降の原油価格高騰、米国（カリフォルニア）における電力危機、同時多発テロの発生、中東

[1] 会議主催者側資料によると、事前登録した会議出席者は 330 名であった。

情勢の緊迫化等を受けて、今日では、エネルギーセキュリティ、環境問題、効率化、それぞれ英語の頭文字をとって、３E の同時達成が最重要課題となっていることを改めて強調した。

- さらに、世界エネルギー会議の事務局長 Gerald Doucet 氏は、エネルギー産業および政府にとってエネルギーセキュリティ問題・安定供給問題は常に基本的重要課題であることを述べた上で、今日でも世界全体では近代的エネルギー（電力等）へのアクセスが不可能な 20 億人近い人口の存在を指摘、低廉で安定的なクリーンエネルギー供給の確保は世界のエネルギー産業・政府にとってますます重要な課題となることを指摘した。そのためには十分な投資確保が重要であり、投資促進のため政治的安定性･法律面の整備等が投資受け入れ側にとって重要であることを指摘した。
- また、最終日（6 月 29 日）の Plenary Session10 でスピーチした BP のチーフエコノミスト、Peter Davies 氏は、発表されたばかりの BP Statistical Review of World Energy 2002 のデータを基に世界のエネルギー需給・市場動向の重要ポイントを概説したが、その中で、特に１項目を起こしてエネルギーセキュリティ問題を取り上げ、セキュリティ問題が今日のエネルギー問題の分析･究明に当って欠かすことのできない重要な視点となっていることを指摘した。

２．北海の将来を巡って

会議開催地が北海開発の中心地アバディーンであったこともあり、Plenary Session２では、北海の石油・ガス開発の問題が議論された。1970 年代以降、非 OPEC の中心として開発が進み、OPEC に対抗する主要供給地となった北海であるが、近年の成熟化進行で今後は生産ピークから減退に向かうことも予想されている。このセッションでは北海の開発に携わる主要プレイヤーとして、産業関係者・政府関係者がそれぞれの立場から以下のようなプレゼンテーションを行った。

- BP の Group Vice President である Tony Hayward 氏は、英国領北海は BP を始めとするメジャーにとって今日でも重要な投資先であるが、既存油･ガス田の成熟化が進むと共に新規の発見規模が次第に小さくなっており、経済性確保･生産量維持のためには最新の技術導入とさらなるコスト削減努力追求が重要と指摘した。その上で同氏は、政府による Fiscal Policy の影響が極めて大きいことも強調、最近の税制見直しで従来の方式と比べて 80 億ポンドもの取り分が政府側に移行していまい、投資インセンティブ上極めて重大な影響を及ぼしうることを指摘した。
- 一方、英国政府側からはエネルギー省大臣代理が英国のライセンシング・システムの概要を説明した上で、英国領北海は確かに成熟化が進んでいるもののまだ資源は十分にあり、石油産業の技術革新・コスト削減努力が進んでいることもあって、現状のままでも今後も埋蔵量の追加が十分期待できるとの考えを示した。

- ノルウェーからは Petoro 社の CEO、Kjell Pederson 氏が参加、ノルウェーの場合は資源ポテンシャルの面で英国より余裕があり、今後も増産基調で推移することを述べた後、主に石油・ガス産業の構造改革（国営会社スタトイル民営化問題、SDFI 解体等）について現状を説明した。また、北海全体での開発を進めていく上での英国との協力や新しいイニシアティブとしての初の LNG プロジェクト（スノービット LNG）等についても言及した。

３．中東のエネルギー情勢・問題に関して

前述したエネルギーセキュリティ問題への関心の高まり、そして将来の石油・ガス需要への対応を考える上で、中東のエネルギー情勢・問題についての世界的な関心は一層増大しているといえる。本会議では、Plenary Session 3 において、中東問題に関して以下のような報告があった。

- まず、イラン Institute for International Energy Studies（IIES）の Seyed Alavi 氏は、イランの石油・ガス部門のポテンシャルが大きいこと、その開発のために進められている外資導入計画について概説した。なお、同氏はイラン国内の政策決定者の中では、世代および過去の経験に応じて、外資導入（への賛否）に対する際立った姿勢の違いがあり、その差異の存在が時として外資との関係を困難にしている場合があることを指摘した。
- 続いて、Center for Global Energy Studies（CGES）の Fadel Charabi 氏は、今後世界の石油需要が大きく増加する場合、経済制裁政策の状況にもよるがイラクには生産量を 600～700 万 B/D 程度まで大幅に増加させるだけの十分なポテンシャルがあることを指摘した。しかし、経済制裁の影響で現状は生産能力に限界が出ており、このまま制裁が継続すれば生産能力が減少する可能性もあると述べている。また、9 月 11 日以降、湾岸石油についてはエネルギーセキュリティ上問題があるとの懸念が広まっていることを指摘、特にサウジアラビアに何か問題が生じた場合、国際石油市場への影響が極めて甚大になる可能性を指摘した。
- 一方、Dundee 大学の Paul Stevens 教授は、「中東依存（の高まり）は本当に問題なのか」という問いかけを行い、今日世の中一般で懸念されている様々な中東に関するリスクを一つ一つあげ、その可能性・影響度（物理的不足および価格高騰による経済への影響）を分析した上で、サウジアラビアの石油政策・安定度に重大な変化・問題が生じない限り、それほど深刻な懸念として捉える必要があるのかどうか、という疑問を敢えて提起した。同時に、同教授はサウジアラビアの問題には大いに注目する必要があり、今後の世界のエネルギー情勢の鍵を握る重要ポイントであることを指摘している。

４．天然ガスの役割

天然ガスについては、国際的な天然ガスシフトに対応して Parallel Session 5、7 と Poster Session 2，Plenary Session 8、9 などで多角的に取り上げられた。

● 大西洋 LNG 市場の拡大について

Parallel Session 5 で、米国 Poten＆Partners の David Nissen 氏と Frank Spaldine 氏の共同論文「The Coming LNG Booming in the Atlantic Basin」は、米国と欧州の発電用天然ガス需要増大に伴う LNG 輸入が急増(2010 年までに倍増)する展望を明らかにした。PowerPoint を使って報告が行われたが、残念ながら前述した Proceedings（CD）にこの報告は収められていない。現在著者にファイルの送信を打診中である。

● 天然ガスの Pricing　について

Parallel Session 7 でオランダの CPB の Douwe Kingma 氏, Mark Lijesen 氏および Machiel Mulder 氏は「Gas-to-Gas Competition versus Oil Price-Linkage」のテーマで発表し、天然ガスの価格は、アジアでは原油 CIF リンク、ヨーロッパでは石油製品炉前価格リンクになっているが、今後このリンクは乖離してガス対ガスの競争が激しくなりガス価格は石油価格を下回る方向に向かうだろうとの見通しをしている。その他 Poster　Session　2 の筆者論文「LNG Market　and　Price Formation in East Asia]等が報告されたが、基本的には同じ論調である。

● Shell の 2050 年シナリオについて

Plenary Session 9 で Royal Dutch／Shell Group の Managing Director、Malcolm Brinded 氏は、2050 年までのシナリオ「Energy Needs, Choices and Possibilities」(Exploring the Future)(別冊配布)を提示した。その中で、ガスへのシフトは急速に進み 2010 年までに石炭を席巻し、大衆の支持を失った原子力にとって変わり、2020 年までに石油の支配的地位を脅かすようになるとしている。しかし、輸入ガスへのエネルギーにおける依存度の増大は、エネルギー安全保障上の問題、安定供給への懸念を呼び起こすことになるとも指摘している。

５．アジアのエネルギー問題について

アジアのエネルギー問題についての論文では」、IAEE 年次大会では年を経るにしたがって多くなっている。ここでは、当研究所からの報告に絞って紹介する。

● アジアのエネルギー問題は、Plenary Session 7 で韓国の元韓国エネルギー経済研究院院長 Hoesung Lee 氏が議長をし、当経済研究所の坂本理事長が「東西アジアの対話と協調」を提起し注目を浴びた。

● 同じく筆者（小山）は Parallel Session 18 で「Energy Market Restructuring in Japan: Implications for World Markets」を発表し、パネル討論をした。同 Session では、中国の Energy Security に対する政策について、英国 Dundee 大学の Philip　Andrews-Speed 氏(報告者)、Xuanli Liao 氏, 同 Edinburgh 大学の Ronald Dannreuther 氏共著の「China’s

Search for Energy Security: Where Energy Policy and Foreign Policy Meet」が発表され、会場からは「中国はエネルギー安全保障、日本は効率化と目指す方向が異なってきたと受け取られるがどうか」との質問があり、「日本は規制緩和により効率化優先と受け取られたとすれば、それは真意ではない。やはりエネルギー安全保障はエネルギー政策の重要な柱の一つである。確かに経済効率化、環境保全等、政策目標が多様化してきているが、基本は変わらない」との応答があった。

- Poster Session 2 で、筆者（藤目）は「LNG Market and Price Formation in East Asia」と題して、1988～2000 年平均日本等東(あるいは北東)アジアの LNG 価格（CIF）は、欧米における LNG 価格（CIF）に比べ百万 BTU 当たり 1 ドル(石油換算バレル当たり 6 ドル相当)高い事とその理由について報告し、かなりの関心を得た。Poster Session とは、落選絵画展のようなもので、アブストラクト提出の段階で、Parallel Session にもれた多くの論文が半日ずつ掲示板(半畳程度の大きさ)に図表等を張り出すものである。勿論中には、Parallel Session の報告よりも秀逸なものもある。面白いのは興味のある人が近ついてきた時に、手短に話し掛け、相手に興味を持たせ掲示物を見てもらうためにあれこれ工夫が居ることである。かつて、ボストンで 20 年近く前会って話したことのある天然ガスの専門家 Jensen(当時は Jensen Associates の代表であったが、何年か前引退し自宅で個人・JAI－Energy で仕事をしている)に再会して議論できたときは感激した。
- 日本を含めたアジアのテーマについては、日本人が元 IAEE 会長松井賢一：当研究所参与(龍谷大学教授)を含め 10 数人参加したこともあり、論文数もかなりになる。その中で、既に紹介したものは別にしてあえて挙げれば、英国王立国際問題研究所(チャタムハウス)の Associate Research Fellow の Keun-Wook Paik 氏の「China’s Natural Gas Expansion」であろう。中国の天然ガス市場の展望が、やや楽観的な感(インフラなどへの投資を賄う資金調達の可能性に付き)はあるが、重要な参考資料であることには間違いない。

おわりに

その後，Proceedings に間に合わなかった paper が 10 論文ほど pdf で追加され、ダウンロードし、また別冊で配布されたシェルの「Energy Needs, choices and Possibilities」（Scenario to 2050）も資料室に収蔵した。また会議の全体像を知りたい方は，プログラムの最終版も収蔵してあるので参照されたい。

なお来年の第 26 回世界年次大会は 2003 年 6 月 5 日-7 日, チェコのパラハで開かれる予定。詳しく知りたい方は，ホームページ http//www.iaee2003prague.cz にアクセスされたい。

お問い合わせ：info-ieej@tky.ieej.or.jp